
SAO ネカマというかなんというか

鴉銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAO ネカマというかなんというか

【Nコード】

N3529Z

【作者名】

鴉銀

【あらすじ】

SAO内で女装する話

SAO編が終了したらAWにも飛び火する予定（予定ではそうなってる）

1話 ユニークスキルへ女装

「え、忘れちゃったのかい。ヒドイ奴だねえ」

「おかしいな、こんなきれいな女性をこの俺が忘れるわけないのに」

「あら、お世辞でもうれしいよ」

「クライン、今のこいつの名前はエヴリルだが本当の名前はリウルだ。この名前なら聞き覚えがあるだろ？ ほら、俺が1階でお前にレクチャーしてた時」

「……ちよつと待て、今思い出してみるわ」

あれは、このゲームを始めてすぐのことだ。

俺は初めてのVRMMOに感動してた。青い空。薫る風。石造りの街並み。目の前に広がる光景は、まるで中世ヨーロッパにタイムスリップしたのかと錯覚するほどリアルなものだった。

きよろきよろしながら町を歩いていると、ふと一人のキャラが目に入った。周りの奴らは、ほとんどが足をとめてあたりを見回してんのに、そいつは前を向いてどこかに向かって走っている。その迷いのないダッシュぶりから テスターだと当たりをつけた俺はそいつに話しかけた。

「ちよいと引率レクチャーしてくれよ！」

その少年は俺の予想通り テスターだった。名前はキリトとかいうらしい。このゲームでの基本的な戦闘の仕方や豆知識を教えてもらいつつも、町から外に出ると、そこには草原が広がっていた。近代化が進んだ今の日本では、まず見ることもできない光景だな。

「おいクライン。オレもそうだったから気持ちは分かるけど、ここはもうモンスターの出現地域だぜ」

おっと、そうだった。まあ、最初のモンスターなんて大抵ノンアクティブモンスターだろうから危険はねーだろーな。

「りょーかい。まあ、この俺様是最弱モンスターにやられるなんてへまはしねえ。それでも、他のゲームではギルドリーダーを務めてたんだぜ」

「へえ、そうなのか。っと、来たぜ。あれがモンスターだ」

10メートルほど先に、青いイノシシが2匹いる。《ブレンジーボア》っていう、他のゲームで言うスライム相当のモンスターらしい。

「片方で手本見せてやるから、その後もう片方で実戦な」

そう言つと、キリトは素早く《ブレンジーボア》に近づいて、スキルモーションに入りスパスパとあつという間に倒してしまった。

「キリトお、そんなんじゃ見本にならねえって」

「あはは……とりあえず、やってみろって」

そのあと、四苦八苦しながらも倒すことができた　あれは強かった。いや、実際には弱いんだけどさあ。

考えても見ろよ、目の前にいるイノシシが突進かましてくんだけ？おりや咄嗟に目をつぶっちゃった。しかもスキルの発動も既存のゲームと違ってコツがいるしよう。最初は全然発動しなかったぜ。まあなんだかんだで勝てただけだよ　そうだ、それで初勝利に喜んでるときに来た奴が確か……

「あれ？　キリトじゃん」

「ん？　ああ、リウルか、久しぶりだな。あ、そうだ。こっちはクライン、今俺とパーティ組んでる」

そうだ、その時にキリトに話しかけてきた奴の名前がリウルだった。

「エー！？　ヒドイなあ……あんなに僕と愛し合ったのに……僕捨てられちゃうんだ……」

は！？　なんだ？　こいつらまさかあれなのか？　同性愛しちゃってるのか！？　って俺は思っちゃったね。

そう言われればキリトの素顔って女顔だよなあ。惜しいなあ。

「な、何いってるんだ！　ク、クライン？　こ、これは違うからな」

……その言い方なんかあやしく見えるぞキリト。って、何さつきから俺は自分の回想に突っ込んでんだ。

「まあ、冗談はここまでにしてっと。はじめましてクラインさん。俺の名前はリウルです。

お互いキリトの恋人として頑張りましょう！ あ、でも正妻の座は譲りませんよ？」

「ま、まだ言うか！」

「あ、ああよろしくな」

それで、確かフレンド登録したんだ……

「じゃあねーキリト。僕このまま次の村に行って、あそこでレベル上げてくるから」

「あそこってまさか巢のことか？ おい、今レベルいくつだ？」

「まだ1」

「1って……死ぬぜ？」

「ダイジョブ、それにレベル一ケタならデスペナないし。死ぬの前提で逝ってくる」

「おい！ 字がおかし……って、行っちゃった」

「掴みどころのない友達だなーキリト。類は友を呼ぶってやつか。もしかしてお前の友達って変な奴ばっかか？」

「お前もその中に入ってるけどな」

「お前！ あの時の変な奴！」

クラインは思考の海から帰って来るなりそう言った。

「変な奴って、失礼だねえ」

（あれ？ でもこいつの名前はエ ヴリルなんだよな？ 何でリウルじゃないんだ……フレンド登録してみるか）

「んが！？」

クラインがおもむろに指を動かしたかと思うと、突然奇声を上げた。フレンド登録にはもエ ヴリルの名前がなかったのだ。その代わりにあるのは灰色の文字で記されたリウルの文字。

「お、おおおおおまっ！ 名前がっ！ おっ、お化けかあああああああ！？」

「は？ ああ、フレンド登録見たのね。そういえばまだエヴリルでは登録してなかったわね」

エヴリルはそういうと右手を空中で振って、自身にだけ見えるメニューウィンドウを出した。そしてフレンド登録のパネルをクリック、さらに登録のパネルをクリックし、対象をクラインに選択して決定のパネルをクリックする。

「これでヨシツと」

エヴリルがひとりうなずいていると、了承ボタンを押したクラインが、そわそわしていた。正直気持ち悪い。想像してみるといい無精ひげにバンダナをつけた山賊風の男が、体をくねくねもじもじしているところを。これほど気持ち悪いものはないだろう。

「なんだいその動き、気持ち悪いよ」

気持ち悪さに耐えかねたのか、エーヴリルは、顔を歪めながら言った。

「……なあ、お前とリウルが同一人物ってことは、今リウルになれるりしちゃうのか？」

「ん？ ああ、なれるよ。なるつか？」

クラインは頷いた。すると、エヴリルはまた、メニューウィンドウを出した。そして今度は特技、特殊技能、ファイナル・アンサー、の順にパネルを押して行く。

突然エヴリルの体が光に包まれた。

「うおっ!？」

クラインが驚いて少々大げさなりアクションをとっているがエーヴリルもキリトも無視する。……哀れクライン。

クラインが気まずそうに咳を一つするころにはもう光はおさまっていた。光の中から現れたのは………さっきとあんまり変わらないエーヴリルだ。

いや、4つほど大きな違いがある。1つは、化粧をしていない。

1つは、胸がない。1つは、服装が違う。そして最後の1つは、名前が リウル に変わっていた。

「ど、どうなってんだあ!？ おりゃ目がおかしくなっちゃまったのかあ!？」

「あはは、僕のスキルだよ。《女装》って言うんだけどね、熟練度900で《ファイナル・アンサー》ってスキルが出るんだ。その効力が外見・システム上での性別の変更なんだよ」

クラインは固まった。それはもう丁寧にビシッ!っという効果音までならして。

「ただ問題があるんだよねえ、コレ」

「問題って何なんだ？」

キリトが質問を投げかけた。自身もユニークスキルを持っていることからその出鱈目な能力もぎりぎり納得できたようだ。クラインはまだ固まっている。

「システム上で二つキャラができたせいで、2体のキャラのレベルが別々の判定になった。《ファイナル・アンサー》を覚えたレベルからだけど」

今度はキリトまで固まった。だがそれも仕方がないだろう。「今のキリトでも、「1週間前」にキリトが耳にしたエーヴリルのレベルの少し上程度だからだ。ちなみにクラインはまだ固まっている。

「な！？ お前どれだけレベル上げに時間裂いてるんだ？」

「キリトと変わらないと思うよ？ 一日大体6時間〜15時間くらいだし」

「ということは、そのリウルでのレベルは低いのか……」

「え？両方あげてるから同じくらいだよ？」

またまたキリトは固まった。

やっと硬直から戻ったクラインも話だけは聞いていたのだろう。また固まった。

自分と同じ時間で倍の経験値を獲得できるなんておかしいじゃないか！！

キリトはそう思っていた。

課金アイテムでも使えば出来るのかもしれないが、課金なんて不可能なこの世界では経験値のふり幅を上げる方法など、まずない。

「あ、この《女装》の効果なんだ。経験値が上がるのは。

《幸運の女神！》って言うってね、レアアイテムドロップ率が8倍

になるのと所得経験値が2倍になるっていう効果。

スキルコンプリートしないとだめだけど……」

「はあああああああああああ！！？！？！？」

「うわい！？ なに！？ 何なのさ急に大声出して」

「俺たちの努力を返せ　……………！！！！！！！！！！」

二人が落ち着くのを待ってからリウルは二人に問いかけた。

「ねえ、そろそろエ　ヴリルに戻ってもいいかな？　いまあっちの方がレベル低いんだけど」

「はあ、はあ、……ああ、いいぞ」

キリトが了承したと同時にリウルの体が光に包まれた。

「じゃーね〜」

リウルはエ　ヴリルになった後、すたすたと歩いて行った。まだ三時だ。これからレベル上げでもするのだろう。

「なあクライン」

「なんでえ」

「何でさっき目細めてたんだ？」

「そりゃあお前、変身物の定番だろ。目を細めたら見えるかなあって思ったわけよ」

「サイテーだな」

「う、うつせえ！」

「……まあ、な、なんだ。その、み、見えたのか？」

「……サイテーだな」

「う、うつさい！ お前にだけは言われたくない」

「おお！？ なんだ！ やんのか！？」

「上等だ！」

この後も二人の口論は続いた……

1話 ユニークスキルへ女装 (後書き)

見切り発車。 次回の更新日は未定

閑話 へ女装へ入手秘話と物語の始まり（前書き）

チュートリアルがどうしても原作そのままになるなあ……

閑話 《女装》 入手秘話と物語の始まり

「なにこれ、 女装 スキル？」

あれはキリトとクラインと別れてすぐの、第1層のことだった。リウルが向かったのは《子鬼の洞窟》。通称ゴブリンの巣だ。推奨レベルは3、ソロなら4〜5はほしいところだ。

推奨レベルが高めに設定されている理由として、巣によるアクティブモンスター化がある。巣と呼ばれる場所にいるモンスターは縄張り意識が強く、多種族が近づくとすぐに攻撃してくるのだ。

だが、テスト時、この洞窟には一つ欠点があった。洞窟の入り口が、ゴブリンが2体しか通れないほど狭かったのだ。巣の防衛を考えると、入り口は狭いほうがいい。だが、それは現実^{リアル}での話だ。

巣に特攻してちよっかいをかける。そして、すぐに撤退してその狭い通路で戦う。これを延々と続けることができたのだ。それが理由で、テスト時、ソロプレイヤーに人気があった場所だ。

リウルは、ひたすらゴブリンと戦っていた。だがその体は、当初の予定とは異なり、大きく傷ついていた。

ゴブリンは、レベル1でも1対1ならスキルを使えば勝てる程度の強さに設定されている。テストで操作に慣れていたので、2対1までなら何とかなった。これで完璧、の筈だったが現実はそう甘くなかった。

おそらく テスト終了後に修正したのだろう。通路は、ゴブリン4体ほどが通れるほどの広さになっていた。また、ゴブリン達も、味方を押しのけたり飛び越えたりと、ハメ防止が施されていた。そ

して、ついに周りを取り囲まれてしまった。リウルの周りを塞ぐゴブリンは七体にもなっていた。

「あちゃー、囲まれたか。」

やっぱ のときと違って修正されてたか。まあいつか、レベルも3あがったし。

つま、最後に人足掻きしますか」

七体のうちの一体が槍を両手に持ち突っ込んでくる。意識が加速する。スローモーションの世界にリウルとゴブリン達だけが入り込む感覚。半身だけずらして回避する。そして、攻撃を避けられバランスを崩したゴブリンの頭 クリティカルポイントにすかさず手に持った槍を突き刺す。小刻みに好きの少ない攻撃ができるということ、もう一つの理由から、リウルは片手槍を装備していた。

槍を突き刺したまま足で踏みつけ、脳髓を抉るように槍を振り抜く。周りに意識を向け、威嚇をしながら踏みつけたゴブリンを突き刺し続ける。そして、首を切り払う。グエツ、と短い断末魔を上げたゴブリンがポリゴンの欠片となって空に舞う。まずは一体。

ソードスキルはまだ使わない。このように囲まれた状況だと、使用直後の一瞬の硬直が命取りとなるからだ。使うとしたら周りを吹き飛ばせるようなスキルだが、そういった範囲攻撃系のスキルはまだ持っていない。とにかく回避を最優先にして常に自分の間合いを維持する。

難なく一体目を倒されたからか、ゴブリンに動揺が走る。ような錯覚をリウルは感じた。そして、先ほどゴブリンを倒したことによって出来た穴から脱出する。包囲網の穴、囲まれたときはこれを作るのが一番だ。

だがそこでリウルは一つミスをした。包囲網を抜けた方向が、洞窟の奥へと続く方向だったのだ。急いで立ち止まり、6体となっ

たゴブリンと相対する。

剣が振り下ろされる。槍による刺突も、棍棒による打撃も一斉に。己の槍に意識を集める。槍が自分の腕の延長になったような感覚。その感覚を維持し、腕の力だけで振り下ろされる剣を弾く。槍を持つていないほうの手で槍を払う。HPが削られる。

手に走る鋭い痛みを堪えて、バックステップを行う。鼻の先を棍棒がかすめる。全身の筋肉に力を籠め、隙だらけになっている3体を薙ぎ払う。そして、その内1体を全力で突く。リウルが時代に愛用していた、槍のソードスキル《クリイヴン・ストライク》の模倣だ。覚えていない技のモーションをしても意味がないが故にできる一種の小技だ。

だが、その一打は大きなダメージは与えたが、致命的なダメージを与えるには至らない。模倣は技使用後の硬直はないが、代わりにシステムのアシストを受けることもできない。単純に、レベル1のリウルの攻撃は軽かったのだ。

このままでは埒が開かないと感じたのか、とうとうゴブリンが全員で襲い掛かってくる。

バックダッシュで距離をキープしつつ、時々槍で牽制する。どんどん洞窟の奥へと向かう。と、その時、先ほどの模倣ソードスキルにより大ダメージを与えたゴブリンが一番後ろにいる所がリウルにははっきりと見えた。

千載一遇のチャンスだ。槍系ソードスキルの初期技、《ダッシュラッシュ》は、相手に向かって尋常でないスピードで突っ込む技である。これを使えば一体減らすとともに、逃げる算段もできる。リウルは迷わず《ダッシュラッシュ》を発動させるための動作に移行した。直後、背中に衝撃が走った。

遠慮なくリウルの背中を殴ったそれは、巣にいるゴブリンの物だった。いつの間にか、巣の奥までたどり着いてしまったようだ。先ほどとは比較することすらおこがましいほどの集団が僕の周りを取り囲む。

まだ、死んでたまるか。弱っているゴブリンを残したまま死ねるか！

その一心で、リウルは再度《ダッシュラッシュ》を発動させようと試みる。腰を低く落とし、槍を両手に持つ。疾走する。風を追い越すような感覚とともにリウルは走る。突き刺す。クリティカルポイントである心臓を一突き。それだけでゴブリンの残りのHPはすべて削り取られた。ポリゴンが爆散する。

そこから2体蹴散らした。そして、HPゲージの最後の1ドットが削れようとした時、突然リンゴーン、リンゴーンと鐘のような音が鳴り響き、青い光の柱がリウルを包んだ。

この現象をリウルは知っている。結晶アイテムなどを使用したときの《^{レポート}転移》と同じエフェクトだ。死んだときのエフェクト変更したのかと考えた瞬間、私は転送された。

石造りの街並みが広がる中世ヨーロッパのような光景は、間違いなく《はじまりの街》だった。《はじまりの街》最大の特徴である黒光りする巨大な宮殿《黒鉄宮》が目の前に見えることから、ここは中央広場のようだ。

ステータスを確認すると体力が1ドットしかなかった。どうやら先ほどの転移現象は死によって発生したものではないようだ。となると、おそらくは運営側の強制転移。テストの時も何回あった。おそらく今回もそうなのだろう。

「バグ？　なんかあったの？」

リウルは隣にいた金髪碧眼の男性に問いかけた。

「あ？　ああ、なんかログアウト出来ねえんだよ。だからじゃねえの？」

「え？」

ログアウトできない？ 何だそれは……リウルは混乱していた。暗闇の中に取り残されたような、まるで世界で自分一人だけになっ
てしまったような感覚。誰もいない、何も感じられない、懐かしい
感覚。

思考の渦にはまったリウルを掬いだしたのは、システムアナウ
スの声だった。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。私の名は茅場晶彦。今
この世界をコントロールできる唯一の人間だ』

リウルは、茅場の声を何度か聞いたことがある。親友の付き添い
で病院に通っていたとき、そこに茅場がいたのだ。茅場は昔から研
究者たちから一目置かれていた。だが、そんなことは露知らず、い
や、茅場の周りにいた医者が茅場を褒め殺していたからだろうか。
まあ、とにかく、当時のリウルは茅場に話しかけたのだ。

「ねえ、にいちゃん。あいつのこと直してよ」

と。それから妙な縁ができたのか、何度か茅場と会っていたのだ。

晶彦さん！？ システムアナウンスは、確かに茅場の声だった。

そのことにリウルは驚愕していた。

茅場はメディア等の表への露出をするような人物ではなかったか
らだ。インタビューも必要最低限しか受けず、また、その方法も電
話やメールであった。

『プレイヤー諸君は、ログアウトボタンが消滅していることに気づ
いていることだろう。然しそれは、決してこのゲームの不具合など
ではない。繰り返す。これは決して不具合などではなく本来の仕様

である。』

「仕……様？」

かすれた声でつぶやく。先ほど質問に答えてくれた男性も目を見開き呆然としている。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない。また、外部の人間の手によるナーヴギアの停止、あるいは解除もあり得ない。もしそれが試みられた場合』

僅かな間。嫌な静寂がその場を包み込む。ゴクリ、緊張からか、思わず息をのむ。そして、その言葉はゆっくりと発せられた。

『ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる』

固まる。脳を破壊するということは、それは、すなわち、殺す。ということに他ならない。

晶彦さんがリウルを殺す？　つまり、僕を殺す？

「晶彦さん！？　どういうこと！」

リウルの近くで嫌な空気が広がる。晶彦さん？　もしかして関係者？　周りの視線がすべてリウルへと向かう。

「おい！　おまえ茅場の知り合いなんだろ！　あいつ止めるよ！　俺をログアウトさせろよ！！　聞いてんのかおい！！！！」

それを皮切りとして、リウルを責める声が増えていく。たまらなくなつたリウルは、人々を突き飛ばしながら路地裏へと逃げる。右に曲がる。ごみ箱を倒す。ごみオブジェクトが辺りに散乱する。どんどんと奥へと進む。追いかけてくる者もいたが、こっちは テスターだ。路地裏で追いつかれるなんてことはない。

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク切断、ナーヴギア本体のロック解除、または分解、または破壊の試み。いずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局及びマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制女装を試みた例が少なからずあり、その結果』

「はあ、はあ」

逃げている間にもアナウンスは流れ続ける。晶彦さんの声が妙に冷たく感じる。

『残念ながら、すでに二百十二名のプレイヤーが、アインクラッドおよび現実世界からも永久退場している』

嘘だ！ と叫んだ。だが、心がそれは本当だと訴えてくる。晶彦さんはこんな嘘を言う人ではない。やると言ったらやる人だ、と。

『諸君らの肉体の心配をする必要はない。今後、現実の体は、ナーヴギアを装着したまま、2時間の回線切断猶予のうちに病院その他の施設へと搬送され、厳重な介護体制の下に置かれるはずだ。諸君らにはあ、安心して、ゲーム攻略に励んでほしい。』

しかし、充分に留意してもらいた。諸君らにとってこの世界はも

う一つの現実というべき存在だ。今後、ゲームにおいて荒優組成手
段は機能しない。HPがゼロになった瞬間、諸君らのアバターは永
久に消滅し、同時に　ナーヴギアによって脳が破壊される。

ゲームから脱出する方法はただ一つ。このゲームをクリアすれば
よい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトで
きることを保証しよう。』

この話が嘘ではないことがはっきりわかってしまった。晶彦さん
は昔から言っていた。私の思うままの世界を作りたい、と。あれは
決して、現実の世界を変えたい、という意味ではなかったのだ。文
字通り、世界を作りたかったのだ！

『それでは最後に、諸君らにとってこの世界が唯一の現実であると
いう証拠を見せよう。諸君らのアイテムストレージに、私からのプ
レゼントが用意してある。確認してくれたまえ』

それを聞いたリウルは、右手の人差し指と中指を揃えて掲げ、振
り下ろした。《メインメニュー・ウィンドウ》を出すための動作だ。
ウィンドウからアイテム欄を開くと一番上にそれはあった。アイ
テム名《手鏡》。

迷わずオブジェクト化して、手に取る。手鏡にはリウルの顔が映
し出されていた。目つきが悪く、少し日焼けしたその顔は、絵にか
いたようなガキ大将顔だ。

しばらく自分の顔をみていると、突然、アバターが白い光に包ま
れた。光が消えると、そこには見慣れた顔があった。

余裕で目にかかる伸ばした茶髪に、丸くて大きい目。アゴは細く、
一見男か女かわからないような顔、もしかすれば女と間違われるよ
うな顔。

間違いなく、現実での自分の顔だった。

『諸君らは今、なぜ？』と知っているだろう。なぜ私は、S A O 及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？ これは大規模なテロなのか？あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？』

うん、わかるよ。リウルは心の中でつぶやいた。これは手段ではなく目的なのだ。茅場はまさにこの状況を作りたかったのだ。

『私の目的はそのどちらでもない。それどころか、今の私は既に一切の目的も、理由も持たない。なぜなら、この状況こそが、私にとつての最終的な目的だからだ。この世界を創り出し、観賞するため、にのみ私はナーヴギアを、S A O を造ったのだ。そして今、全ては達成せしめられた……異常で、《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君 健闘を祈る』

茅場の演説の後、すぐに行動した。テスターは、思ったよりも少なかった。テスターですらそうなのだから、一般プレイヤーが動く気配は皆無に近い。

皆が茫然としていた。不安そうに辺りを見まわしたり、すでに消えた茅場に叫んだり。泣き出すものや座り込む者もいた。

そんな中リウルは、速攻で町の外に出た。本来なら慎重に慎重を重ね、装備を整えたりすべきなのかも知れないが、はじまりの街付近に市販の物以上の槍はない。レアドロップの槍、クエスト報酬の槍は共に2階層だったと把握している。また、消耗品等は既に揃えてある。レベル上げ以外にすることがなかったのだ。

そして、無謀にもゴブリンの巢のある洞窟に向かい、ゴブリンをたおし続けた。体力が減るとポーションを浴びる。それを繰り返す。異常とは思えない光景だが、リウルには死なないという確信があった。

だが、世の中に絶対はない。この世界の死が、リアルでの死につながるというルールが本当かどうかはなかったが、念の為、巢への特攻は控えめにして体力マジンを気にしながら戦っていた。死と隣り合わせの戦いは、手持ちのポジションが少なくなるまで続いた。

最後のゴブリンを倒した後、リウルはレベルアップによって与えられた能力値を振り分けようと、メニューウィンドウを開いた。能力値をどのような割合で腕力、敏捷力に振りわけるか悩んでいると画面端に新しいスキルを入手していることを示すポップが現れていることに気づく。リウルは能力値を後回しにして、スキルウィンドウ開いた。すると、そこにあったのは、

「なんだこれ？《女装》スキル？」

テスト中にも聞いたことがないスキルだった。正式で新しく増えたのだろうか？ それとも噂に聞くユニークスキル？

いくら悩んだところで答えは出ない。考えることを放棄したりウルは、とりあえずそのスキルをスロットにセットすることにした。

《女装》にカーソルを合わせると、スキルの詳細が表示される。熟練度0における効果は《女性専用アクセサリ―装備可》。男性が女性用の装備を使用できるようだ。

これは地味に便利だ。SAOにおけるアクセサリ―には付加効果

があり、顔周辺のアクセサリーは女性用のほうが、腕や体につけるアクセサリーは男性用のほうが効果が高いのだ。また、ピアスは男性は左、女性はその右という決まりがある。それを無視出来るというのはなかなか。意外といいものを手に入れたのかもしれない。

「よし、次の村行くか」

リウルは気付かない。《女装》がセットしているだけで、ありえないスピードで熟練値が上がっていることに。そして、女装という言葉に、なんら抵抗を感じていないということに……

閑話 へ女装へ 入手秘話と物語の始まり（後書き）

次回更新は25日。

オレンジプレイヤー

夜遅く、コンコン、とノックの音がした。

アスナがキリトに目配せする。キリトは、若干アスナをジト目でにらんだ後、トロトロと玄関へ向かった。

「はい」

キリトがドアを開けると、そこにいたのは……

「やつほ、元気にしてたかい」

「まったく、昔からぜーんぜん両想いだって気づいてなかったのに……気づいた途端すぐ結婚なんかしちゃって……あんたらがいない時は、アタシがあんたらの分全部引き受けてるんだからね！ アタシが死んだらあんた達のせいだかね」

「お、おう。ごめん」

キリトとアスナがエヴリルの愚痴を聞きはじめて2時間。二人はさすがに嫌気がさしていたが、愚痴の内容の大半は自分たち夫婦が休んでいるしわ寄せのせいだったので、おとなしく聞くしかなかった。

「で、あんた達いつ子供できんの？」

エヴリルの目が据わっていた。完全に酔っ払っている。

「な！？ ていうかお前何飲んでんだ！ 酒は20未満は禁止だろ
うが！」

「そ、そうよ！ エイヴ、もうお酒はやめなさい（そうじゃないと、
これ以上は私達がもたないわ）」

キリト達は説教が始まってから三十分程経った時に、エヴリル
によって正座を命じられていた。SAOのトッププレイヤーである
二人も、1時間半にも及ぶ正座には勝てなかったようだ。

「これはお酒じゃなくれジュースだよ、ジュ・ウ・ス」

「わ、分かったから、それはジュースだから。もう寝ろ。な？ 愚
痴なら明日また聞いてやるから」

「アタシは愚痴なんか言ってないわよ！ あんた達に文句を言っ
てるだけ」

そう怒鳴って立ち上がると、エヴリルは廻廊結晶を取り出した。

「ちょ、お前、それ、廻廊結晶じゃん！ まさか…！」

キリトが何か言いきる前に、エーヴリルは廻廊結晶をかがげ、使
用していた。すると、部屋の隅に直径10？ほどの光の玉が現れた。

「ああ、めったに手に入らないのに。もったいないだろ……」

「ここつてさあ、遠いんだよね。町から。だからいいじゃん。ね？
返事は聞かないよ」

エ ヴリルはそう言うところよるとキリト達の家から出て行ってしまった。

「どうすんだよ、これ」

「さ、さあ」

次の日、自分の宿で目が覚めたエ ヴリルは後悔していた。

「ああああああああ、なんであんなことに……お酒は飲んでも飲まれるなってエギルに言われてたのに。ちょーつとあの新婚どもに文句言ってやろうと思ったただけなのに……！」

飲まれなければ飲んでもいいというが、エーヴリルは飲酒してはいけない年齢であるのでそれ以前の問題だ。

「はあ、最近ついてないねえ……ん？ なんだいあれ」

町の入り口の方から大勢の人々が入ってきた。通常、パーティを組む時は4〜6人がベストとされている。これ以上多くなると実の入りが少なく、効率が悪いからだ。いくつかのパーティが一緒に狩場まで向かうことはあるが、パツと見ても30人ほど確認できるのは明らかに不自然だ。あんな人数は、攻略戦の時ぐらいしか見れな

いだろう。

「何で団体？ あんなに大勢だと、モンスター倒しても旨みが少ないし、時間の無駄じゃないのかねえ。お！ あの店の焼き鳥おいしそうだ！」

エーヴリルは、焼き鳥屋の中に入って行った。

「……ちよつと買いすぎちゃったかねえ。あとでキリト達にでもおすそわけしようか。」

でもキリトン家って遠いしねえ。のんびり食べながら肩慣らしにこのエリアのモンスターでも狩るかねえ」

町の入り口に着くと、門を出てすぐのところでオレンジプレイヤーが座り込んでいるのが見えた。体力がイエローゾーンになっていたので、少し観察してみる。

（茶髪のショートカット、背は低めで、多分小学校高学年か中学1年くらいの女の子？）

「っ！？」

エーヴリルは衝動的に走り出していた。その子の眼が、現実で自分^{リアル}が、一番大切に思っている子にそっくりだったからだ。魂の抜け

たような顔の中にぽっかりと浮かぶ、絶望後悔恐怖、人間が思い浮かぶおおよその負の感情をねじ込んだ眼。どこか焦点が定まっていないようなその眼を見た瞬間、エヴリルは自分の体を制御できなくなっていた。

「私、一応攻略組の一人で、今日は気分転換にこのエリアまで降りてきてたんです。

そしたら、ここでモンスターに囲まれてるパーティがいたんです。みんな、HPがレッドゾーンに入ってたから助けなきゃって、周りのモンスターをたおそうと急いで向かったんです。それで、モンスターを2体ほど倒したら、囲まれてたうちの一人が錯乱して、剣を振りかぶって襲いかかってきたんです、私に。それで、……そんなつもりなかったんです！　ただ、剣をはじこうとしたら……っ」

「もういい、もういいよ、大変だったねえ」

シイタと名乗った少女は今、エヴリルの胸の中で泣いていた。助けようとしたプレイヤーを殺してしまったのだろう。ただ傷つけてオレンジプレイヤーになったにしては、不自然なくらい動揺している。そして、パーティの他のプレイヤーが町に逃げたか、目撃者でもいたのだろうか。

さつき町に入っていった団体を思い出す。おそらく、いや、確実に人殺しと罵られ、町の人から攻撃されたのだ。少女のHPがレッドかイエローゾーンになるまで。

（そうか、あの時の集団はこの子がらみだったんだねえ）

「よしよし」

泣きじゃくる少女の頭を撫でながら、決意する。この子の味方になろう、と。それには、早急に到着ける場所を探す必要がある。だが、今、町に入れるわけにはいかない。すぐそばにある町には、少女に暴行を加えた集団がいるのだ。どうすれば良いのか必死で頭を回す。と、エーヴリルの頭に一つの名案が思い浮かぶ。

「そうだ！ 廻廊結晶！ 昨日廻廊結晶をキリトの家で使ったんだっ！ いまから転移するけど、大丈夫かい？」

「……はい」

キリトに頼んで一日置いてもらう。それが、エーヴリルが思いついた名案だった。あそこなら町の中ではないし、トップクラスのプレイヤーが2人もいるから安全だ。

その間に自分で家を買う。その家にでこの子と一緒に住む。エーヴリルはそう決めたのだった。

善はいそげ。とばかりに、つい先日設置したばかりの廻廊結晶を使用し、キリト宅へと突入したエーヴリルは、連れてきたシイタと手に持つ焼き鳥をキリトに渡した。そして、

「ちょっとこの子1日だけ預かって！ シイタ、こいつはキリト、馬鹿だけど信用できる。それにアスナっていう強くてかわいい女の

子もいる。つらいだろうけどちょっとだけここで待っててね」

そう言い残し、扉が壊れるかと思うほどの勢いで出て行つた。

「なんだったんだ？ いったい……ってこの子泣いてる！？ 大丈夫か？ ってオレンジプレイヤー……！！？！？」

キリトがパニックになり叫んでいると、さすがに騒ぎに気付いたのか、隣の部屋でくつろいでいたアスナが勢いよく扉を開ける。

「どうしたのキリトくん！ ってあー！！ 何さっそく浮気してるのキリトくん！！ その女の子は何！？ ツオレンジプレイヤー……！！？」

アスナはキリトの腕の中で泣く少女がオレンジプレイヤーだと知ると、反射的にレイピアを構えた。

その切っ先を向けられたことにより、町の前でのことを思い出したシイタはキリトに縋り付く。

キリトはまずいところを見られたと思い硬直していたが、アスナが放つ一触即発の空気にあてられ我に返り、少女を抱きしめてアスナとの間に入る。

「ってちよつと待ったアスナ！ この子はさっきエイヴが連れてきたんだ！ ほら！ 部屋の隅にあった廻廊結晶の光が消えてるだろ！？」

臨戦態勢は崩さず、アスナは部屋の隅に意識を向ける。確かに昨日エーヴリルが残した廻廊結晶の光が消えている。事態を理解したアスナは、レイピアを一振りして鞘に戻した。

「なるほど。エイヴが連れてきたと……で、なんでキリトくんはそ
の子を泣かして、あまつさえ抱きしめてるのかなー？ そんなにそ
の子が可愛かったのかなー？ 新婚なのに早速浮気しちゃうほどか
わかったのかなー？」

天まで届こうかという悲鳴が一つあがった。

「ただいまシイタ！ 預かってくれてありがとうとキリト！ って、な
んでそんなにぼろぼろになってんのぉ？」

「お前のせいだ……バカ野郎」

キリトはボロ雑巾のようになって床に転がっていた。

「そんなことよりシイタはどこだい？ もうちょつと付き添ってか
ら行けばよかったのに、柄にもなく焦っちまったよ。早く会って安
心させてあげないと。」

「一応あの子から事情は聞いた。いまはアスナの部屋にいる。早く
行つてやれ」

「ありがとう！ じゃーね」

エーヴリルは急いで二回に向かい、アスナの部屋の前に立つ。そ

して、扉をノックした。

「アタシだよ。入ってもいいかい？」

「いいわよー」

アスナが言い切る前に扉が開き、エーヴリルが駆け込んでくる。そしてベットのの上に座っているシイタを抱きしめる。

「ごめんねえ。もうちょっとそばにいてから行けばよかった」

「いえ……どこへ行ってきたんですか？」

「うん。家買ってきたよ」

ニッコリ笑ったエーヴリルのすぐ隣にいたアスナが驚く。

「ええ！？ エイヴって確か、家なんかいらさない。宿で十分って言うてたじゃない！」

「この子と一緒に住むんだよ。この子はオレンジプレイヤーだから宿にも困っちゃうじゃない」

「……同情ですか」

「そう思ってもらってかまわないし、実際その通りだよ。でも、ほっとけないんだ。アタシと家族になろう？ 一緒に暮らそう？」

「っ！ 人殺しなんですよ！ 私は！ 人殺しの友達なんていやでしょ！ もうほっといてください！」

胸の中に吹き荒れる激しいものを、シイタは感じていた。分厚い雲に覆われ、強烈な風が雨をさらい、雷が鳴り響く。シイタの心は嵐に支配されていた。

「人殺しの友達が嫌だなんてことはないよ。リアルにもそんな友達いるし」

「そんな人いるわけない！ 馬鹿にしないでください！」

「エイヴの交友関係が不思議すぎるわ……」

「もう、アスナったら。水はさまないでちょうだいな。」

「はい」

睨まれて、アスナは頭を下げる。

「さて……バカになんてしてないよ。それに、この話は本当なんだよ。アタシはあの子と友達でいることを誇りに思ってる。リアルのアタシの半分はあの子に占められてるといつてもいいくらい。なんなら現実リアルに戻った時に紹介してもいいよ。アタシの本名を教えてもいい」

SAO最大のタブーである現実リアルの話。それを一切の躊躇なく話していくエーヴリル。嵐は過ぎ去っていった。

「本当……ですか？」

「ああ。信じてくれるのかい？」

「……一応、わかりました」

「それならいいんだ！　でだ、さっき言ったけど家を買ったんだ。一緒に暮らそう？」

シイタは俯いて考え込む。自分が宿を借りていた町にはもう戻れない。あの町にいる人の大半がああ騒ぎを知ってしまったているだろう。それに、別の層へ行ったところでシイタはオレンジなのだ。普通の生活はもうできない。町に入ることすらままならないのだから。

「なんで……そこまで……？」

歡喜、戸惑いなど様々な思いがわきあがるが、何よりも警戒心が先に立った。正直、シイタはもうエーヴリルのことを疑っていないが、ここまでされると逆に怪しく見えてくるものだ。

甘い話には裏がある。というものだ。特にここ、SAOの中では。

「え、あー……シ、シイタが、さっき言った子に、似てる、から……」

エーヴリルの顔は真っ赤になっていた。マンガか何かのようなセリフが、自分の口から出たことが恥ずかしいのだろう。

「……私とその子を重ねてるんですか？」

「そうかもしれない。シイタは彼女と同じ眼をしているしねえ」

「眼？」

エーヴリルがシイタの眼を覗き込む。その目に映っている自分の眼を見るが、シイタにはいまいち理解できなかった。

「そう、眼。彼女もシイタみたいに絶望と孤独が入り混じった眼をしてた。自分は人殺しだ。誰ともかわってはいけないうて」

「……その子はもう克服したんですか？」

「いいや、まだ。今でもアタシがいないときはそんな眼をしてるみたい。アタシとしてもたまにするしね……」

「そう…ですか」

「これからゆつくり克服していこう？」

「そう…ですね」

シイタは、ぎこちないながらも笑みを浮かべる。それにつられ、エーヴリルも笑顔になる。

笑えるならまだマシかね。当時は表情一つ変わらなくなったあの子と比べれば。と、エーヴリルは考える。

「あー、もう話してもいい？」

「なんだいアスナ、まだいたのかい」

ジト目でアスナを見るエーヴリル。

「いたわよ！　そもそもここ私の部屋よ！」

「ああ。そうだったね。忘れてたよ」

「あの……いきなり押しかけてきてすみませんでした」

「ああ、いいのよ？ 事情聞いた限りじゃ、私だってエイヴと同じことしてたでしょうし……大変だったわね」

「いえ、エーヴリルさんがいてくれるので平気です」

「さて、そろそろアタシ達の家に戻ろうか、シイタ」

おもむろに立ち上がったエーヴリルは、メニューウィンドウを操作しながら言った。

「これでよし。シイタも自由に家に入れるようにしたからさ。行くうじゃないか」

「はい。それでは、さようなら。アスナさん」

「うん、バイバイ。ところでエイヴ、どこの家買ったの？ 今度招待してよ」

「うん？ 隣だよ。アンタ達とも近いほうが安全かなーって思ったしねえ。ま、隣って言っても300メートルくらい離れてるけどね」

アスナの顔が引きつる。

「……マジ？」

「マジ。じゃあね」

そのままエーヴリル達はキリト宅から出ていった。そのまま30メートルほど西に歩いていく。とはいっても、道らしき道はなく、草や木だらけの薄暗い森の中を歩いているので、その300メートルは少し遠く感じる。

しかしそこは攻略組の二人。道なき道であつてもスイスイと進んでいく。元氣のないシイタに合わせているので実際にはそれほど速いペースではないが。

数分も歩くと、少し開けたところに一つのログハウスが見えてきた。

「あれがあたしたちの家だよ」

「あれが……」

間近で見たその家は、とても大きく感じた。先ほど見たキリト宅より、ひとまわりもふたまわりも大きいのではないか思える。そんな立派な家を自分の為に買ってもらったことを、シイタは申し訳なく思った。キリト宅は、あの夫婦が二人で稼いだお金の中から結構な額を使ったのだろう。そのキリト宅よりも大きな家の代金をエーヴリル一人に背負わせるのが平気なほど、シイタは厚顔無恥な性格ではなかった。

「あの、半分払います!」

「いいんだよ。子供は甘えてれば」

「そういつわけにはいきません! 私もこれでも攻略組の一人です。お金なら結構持ってます」

「そうかい？　なら40万÷2だから、20万コル持つてるかい？」

「……あ、はい！　持ってます。いまトレード出します」

値段に納得いかなかったので抗議しようと思ったが、何を言ってもこれ以上は貰ってくれないだろうと思い、メニューウィンドウを操作し、トレードを申し込む。20万コルに設定し、確認、完了ボタンを押す。

シイタは前から家を買おうか悩んでいたので、SAOの不動産屋のような立ち位置の店に何度か足を運んでいた。それゆえに、この家が40万では済まないことをわかっていたのだ。

「じゃ、入ろうか」

「はい」

中はキリト宅とそれほど変わらない造りだった。しかし、キリト宅とは違い階段が見える。2階があるのだろう。また、一階だけで3部屋あり、キリト宅より1部屋多い。二階に上がると部屋は一つ、ベッドが二つとタンスがあるだけの寝室だった。

「さ、ベッドとタンスは置いといたけど、あとは全然いじってないからね。取りあえず1階戻って部屋の編集しようじゃないか」

さっき上がった階段を、意気揚々と下りていくエーヴリルを見て、リウルは小さく笑う。この人となら頑張れるかもしれない。少なくとも今は、そう思える。

エーヴリルが男だと知ったシイタがちょっとした騒ぎを起こすの

はもう少し先の話。

オレンジプレイヤー（後書き）

ようやく物語の導入部が終わったって感じですかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3529z/>

S A O ネカマというかなんというか

2011年12月25日15時53分発行